Don't stop smile

エプロン通信員　津原　涼子

新しい年が始まりました。あけましておめでとうございます。皆様はどんなお正月を過ごしましたでしょうか？私は『今年』の目標ではなく、『人生』の目標を見つけました。

それは「毎日を楽しむ努力をする」ということです。3月11日の震災以来、普通の毎日がどんなに大切かをテレビで皆さん口々におっしゃいます。私もそうだよねと思いつつ震災から10ヶ月が経とうとしている今、ようやくその言葉が身に染みてきました。

というのも、一つのちょっとした出来事がきっかけです。風邪や流行のインフルエンザを気にして家に籠りがちな私でしたが、〝宜野湾市の産業まつりがあるよ〟と教えてもらい、プログラムを見ると〝山羊おーらせー〟（闘牛の山羊版）があることを知りました。それを知ったとたん、昔から闘牛が大好きで赤道の闘牛場へよく出かけたことを思い出し、心がワクワクするのを感じました。山羊のおーらせー、ぜひ見たい！寒いだの風邪だのと考えず小学六年生になる娘を連れて、会場である市民広場へと出かけました。着いたとたん「魚汁の無料試食があるよ」とおばあちゃんが声をかけて下さり長い行列へ一緒に並びましたがいっこうに魚汁の匂いがしてきません。娘に、「行列の最初に行って何がもらえるのか確かめて来て」と頼み、OK！と走って行く娘。ニヨニヨ顔で戻ってくると、「魚汁じゃなくって海ぶどうだって」と言。2人で笑いながら、試食はあきらめて、近くにあった車の運転技術を測れるテストを受けました（私はAからEの5段階でCでした）。他にも楽しめるイベントが沢山ありました。山羊おーらせーは仕事の都合で見ることが出来ませんでしたが、外でのびのびと娘と共に楽しく過ごせました。こうして、好きなことに触れようとしたことがきっかけで、家の中でも、ご飯を作る時はおいしいねっと言ってくれる家族の顔を考えながら作ったり、手抜き料理の日も、♪今日は手抜きよ～♪と歌を歌ったりと楽しく過ごすようにしていました。すると娘が、「母さん、何かいいことがあったの？」と笑いながら聞いてきました。そこでやっと私は〝いいことがあったから笑う〟のではなく、〝笑うからいい事が周りに増えるんだ〟と気づけました。私は今年、Don't stop smile（いつも笑顔で）で頑張ります。皆様もどうか豊かな一年になりますように、お祈り致します。

茶ぐわーゆんたく 93

豊穣の記憶／抵抗の記憶

昨今の情報誌等によると、国道58号を伊佐交差点から右折し、普天間に至る県道沿いの一帯は「夜景のきれいなエリア」などとしてしばしば紹介されています。夜ともなるとオレンジ色に照らされるキャンプ・ズケラン一帯ですが、ここにはかつて伊佐浜の青々とした水田が広がっていました。

今からちょうど60年前、1952年1月の地元紙が報じるところによると、当時行われた宜野湾村産業共進会にて、伊佐浜のある篤農家の水稲が当時の平均収穫量の5倍にも相当する、沖縄一の収穫量を記録したとあります。この新聞報道にみるように多収穫で名をはせた伊佐浜の島米ですが、実はその品質についても折り紙つきで、「病気をも吹き飛ばす」と言われたほどでした。このように質・量ともに「沖縄一の美田」を誇った伊佐浜の水田ですが、それは沖縄戦で荒れ果てた耕地を何年にもわたって根気強く開墾した賜物にほかなりませんでした。

しかしながら1954年7月、突如として米軍は伊佐浜の水稲の植え付けを禁じ、翌55年には伊佐浜の約13万坪にも及ぶ肥沃な水田を容赦なく接収しました。立退かされた伊佐浜の住民は離散を余儀なくされ、ブラジルへと渡った方々も少なくありませんでしたが、伊佐浜の人々のきわめて根強い抵抗は沖縄の政治・社会を突き動かし、「伊佐浜土地闘争」と呼ばれる大きなうねりとなりました。

「夜景のきれいなエリア」には、伊佐浜の豊穣の記憶、そして抵抗の記憶が刻まれています。このコラムに目を通された方もぜひ一度足をお運び下さい。

（文責　清水史彦）

▲伊佐浜の青々とした美田（撮影年代不明）

「宜野湾市史」への問合せ
教育委員会文化課 ☎893-4430